

## 日本気象学会および関連学会行事予定

行 事 名	開 催 年 月 日	主 催 団 体 等	場 所	備 考
数値モデルの系統的誤差に関するワークショップ	1988年9月19日 ～23日	WMO	カナダ・トロント	
月例会「長期予報と大気大循環」	昭和63年9月28日		気象庁	Vol. 35, No. 5
The 2nd International conference on Atmospheric sciences and Applications to Air Quality	1988年10月3日 ～7日	国際組織委員会 国内組織委員会	日本学会議	Vol. 34, No. 9
日本気象学会 昭和63年度秋季大会	昭和63年10月26日 ～28日	日本気象学会	宮城県民会館	Vol. 35, No. 5
第26回粉体に関する討論会	昭和63年10月27日 ～29日	同討論会	石川県社会福祉会館	Vol. 35, No. 4
大型レーダー国際学校	昭和63年11月24日 ～28日	京都大学超高層電波研究センター	京都市・烏丸京都ホテル	Vol. 35, No. 4
第2回 WCRP シンポジウム	昭和63年11月28日 ～30日	WCRP 協議会	京都大学楽友会館	
第10回風工学シンポジウム	昭和63年12月1日 ～2日	同運営委員会	東京・中央大学理工学部	Vol. 35, No. 4
風に関するシンポジウム	昭和63年12月9日	日本農業気象学会	つくば市・農業環境技術研究所	Vol. 35, No. 6
月例会「レーダー気象」	昭和63年12月20日		気象庁	Vol. 35, No. 7

編集後記：東日本の梅雨明けがとうとう7月末までお預けとなり（この編集後記原稿締切り日である7月28日までは少なくとも「宣言」なし）、千葉の海岸では海水浴客は半年の半分以下、銚子気象台ではもうチョット「我慢」して下さいと、昔のインスタント・ラーメンのCMみたいなことを言っていると、新聞にありました。

梅雨明けの主役である亜熱帯高気圧の強化が（特に日本の南東沖で）遅れたことによるのはもちろんですが今年の梅雨期の対流圏中層の流れが例年と異なり、通常日本の緯度では日本の西に気圧の谷がある（いわゆる「西谷」となる）ところが、今年は「東谷」が目覆うばかりに持続、オホーツク海付近の尾根とともに逆位相パターン（高緯度に高気圧、低緯度に低気圧の型）が停滞、寒気を南下させ続けたことが主因でしょうか。この逆位相パターンはブロッキング現象の主要な形態の一つですが、ブロッキングというオバケはいつも神出鬼没で、意外性というカバンをもって、予報官のところであらゆる悩みを押し売りにきます。特にこの頃は、気象界が、熱帯、熱帯と低緯度にばかり熱い視線を送っているのを妬んでか、一番肝心なときにイヤラシさを発揮するあたり

は流石です。

さて国際化の波がますます高くなる昨今です。「国境がない」大気を扱っている気象界は、国際性の面で先進分野であるのは当然ですが、「天気」8月号には、世界の中での日本の気象学活動の位置を特に考えさせる記事が多かったのではないのでしょうか。光田氏と佐橋氏による日中協同研究に関するものでは、「日本の気象界にとって最も大切な外国は中国である」という常識の再確認をしましたが、二宮氏によるWMO「短中期天気予報研究作業委員会」等の報告の中では、日本の気象学会における研究分野の偏りと application や field experiment の貧弱さが極めて正当に指摘されて心が寒くなり、岡本氏等の解説「大気汚染の長距離輸送モデル」で紹介された多くのモデルのなかに日本のモデルが皆無のようであることに愕然としたのは筆者だけでしょうか。「研究者層の薄さ！」「研究対象の幅の狭さ！」ということでしょうが、もう一つ日本の研究者に流行を追う傾向およびそれと表裏一体の模倣癖があるような気がしますがいかがでしょうか。（ただし筆者にはこんな大きなことをいう資格はありませんが……）

(M. S.)